様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２１０４

研究課題名（和文）危機と音楽：インドネシア・バリ島、スハルト政権崩壊後の〈聖なる音楽〉の複製

研究課題名（英文）Crisis and Music: The reproduction of 'Sacred Music' after the fall of Soeharto's Regime

研究代表者
野澤　暁子（篠田暁子）（NOZAWA, Akiko）

名古屋大学・人文学研究科・研究員

研究者番号：２０３４０５９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では音楽人類学的観点から、20世紀末よりインドネシア・バリ島で普及した神聖なガムラン音楽「スロンディン」の復興現象を対象に調査研究を行った。この現象の要因として着眼したのは、1998年のスハルト政権崩壊にともなう社会不安である。以上の背景から本研究は社会的な危機意識の克服手段としての音楽の役割を分析し、その成果を論文（e.g.「想像と記憶の音楽再興－インドネシア・バリ島、複製技術時代における音と形のダイナミズム－」『人類学研究所　研究論集第２号』、南山大学人類学研究所)および国際学会での研究発表として発信した。

研究成果の概要（英文）：This project investigated the musical revival of the sacred gamelan Selonding which prevailed in Bali(the republic of Indonesia) after the end of the 21 century. The point at issue is the social disorder due to the fall of Soeharto's regime in 1998. Focusing on this background, this study analyzed the function of music as a means for overcoming social anxiety and the result was published by articles (e.g. 'The Imagined Music Revival: The Dynamism of the Balinese Sacred Gamelan SELONDING in the Age of Technological Reproducibility' in Anthropological Institute Vol.2, Nanzan University) and paper presentations at international conferences.

研究分野：音楽人類学

キーワード：Crisis　Music　Revival　Bali

１．研究開始当初の背景

（１）バリ島の古楽復興への関心：

本研究は、インドネシア共和国バリ島で20 世紀末より急増した古楽スロンディン(Selonding)の復興現象である。スロンディンはバリ島の一部の村落において伝承され、楽器そのものが神聖な存在として扱われてきた。一方で都市部におけるスロンディン復興（複製）の現象は 1998 年のスハルト体制崩壊による社会不安と連動した、音楽文化における反動主義の現れである。本研究は、バリ島における本事例を歴史的転換点における音楽文化創造／再興のメカニズムから分析することを目的に構想された。

（２）普遍的命題としての「危機と音楽」：

現代は世界規模で人、モノ、情報の流通が多方向化し、社会全体に不確実性を与えている。ではリスク社会と呼ばれる現代的状況において、音楽という存在はいかなる価値をもつのか。この問いのもと、本研究はバリ島の都市部の生活が直面する危機意識と伝統音楽の動態を「危機と音楽」という普遍的観点より、音楽の生成要因および人類社会における音楽の分析を主軸とした。

２．研究の目的

本研究の独創点は伝統音楽に対する静的な視点を排し、社会不安を根底とする音楽生成を通じて「人間存在にとって音楽とは何か」という問題を問うところある。さらに本来「神聖＝本物」の対比的性格をもつレプリカ楽器が、ヒンドゥー儀礼への導入を通じて真正性を帯びていく現実は、ベンヤミンの複製芸術論のポストモダン的逆説現象として考察に値する。社会再編に伴う「スロンディンの神聖性」を介したシュミラークルな伝統回帰のあり方は、アンダーソンの想像共同体論とはまた性格の異なる事例でもある。

この「神からの贈物・スロンディン」をめぐる現代バリ社会の位相の研究を通じて得られる成果は、将来的に価値ある文化記録および音楽文化生成に対する新たな知見の提示である。特に観察の過程では、「楽器（モノ）―状況／変化（コンテクスト）―意味づけと行動（コト）」の関係に焦点をあて、この現象に潜む人間と音楽の通時性・共時性、音楽文化の生成条件を引き出すことを目標とする。

３．研究の方法

本研究の遂行は、「①理論的文献研究」「②現地調査」「③映像民族誌の制作」の三要素から構成される。①では音楽学としての「音楽とコミュニティ」、文化人類学としての「リスク社会と危機」、地域研究としての「ポスト・スハルト時代のインドネシア・バリ島における政治的経済的状況」の三側面から本事例を分析する。②においては、「スロンディン新興現象の実態」と「当該地域の社会的状況」の両面から綿密な聞き取りを行う。その記録データを③としてまとめ、国内外の研究機関との共有化を図る。研究進行においては南山大学人類学研究所の共同研究「危機と再生の人類学」、所属学会（文化人類学会、国際伝統音楽評議会／ICTM）など、国内外の研究者との意見交換によって成果の促進を図る。

４．研究成果

本研究では文献調査による理論的枠組を

ふまえた上で、特に現地におけるスロンディン復興活動の微視的観察に焦点を当てた。その結果以下の知見を得たため、それらを理論的に収斂化した上で論文および学会発表として発信を行った。

（1） 音楽復興における身体と記憶：

バリ州ギャニャール県を中心に行った実地調査で得た一つの発見は、未知の経験が「複製／再生産」を通じて実体化するプロセスである。まず本事例の場合、再興活動の主体である人々を動機付けているイメージは、他者（研究者）によって構築された言説と、録音技術を通じて拡散した複製音源との混交体である。ここにおいて重要なのは、情報として浮遊するイメージが主体の身体的記憶（音楽経験）とモノ（楽器）との相互作用を経て、最終的にそれぞれにオリジナルな様式や価値を生み出すという文化再興のありかたである。

ここで注目すべきは、スロンディンとその再興の担い手との間に歴史的な連続性が欠けているという点において、「過去の再現としての音楽再興」という素朴な前提とはむしろ逆の、「想像の産物としての音楽再興」という側面である。こうした情報受容型のヴァーチャルな過去の創造に、今日の音楽再興の特質があるといえる。さらに重要なのは、こうした「未知の過去」への夢想が具体的な「音のかたち」として受肉するのは「既知の過去」の中にある、という点である。この復興活動の実践過程では、それぞれのスロンディン楽器は主体の身体に内在する音楽経験の介入を経た上でオリジナルの様式へと再編されている。このプロセスは、まさに哲学者ベルグソンが「すべての知覚はすでに記憶なのである」と表現するように、「音―身体―記憶」の根源的な関係性を示していると考察した。この特質はペジェン村とパヤンガン村の事例に顕著にみられ、主体それぞれの音楽経験が複製スロンディンの鍵板配列に特有の様式を生み出している（写真, 図 1-2）。この観察をふまえ、身体記憶がスロンディンの楽器構造の多様性と密接な関係にあると推論した。なお、この知見については項目５[雑誌論文：１、学会発表：５]で成果発信した。

写真: パヤンガン村の複製スロンディン

［図１：ペジェン村主催者所有のスロンディン楽器の鍵板音列］（ゴン・クビャールによる影響）

楽器名称＼鍵板番号	A2							A3							A4							A5							A6					
	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2
①チュリン・アリット																										●	●	●	●	●	●	●	●
②チュリン・アグン																								●	●	●		●	●	●	●		
③ニョンニョン・アリット																			●	●	●	●	●	●	●	●							
④ニョンニョン・アグン																	●	●	●	●	●	●	●	●									
⑤プトゥドゥー(1)																●	●	●	●														
⑥プトゥドゥー(2)																●	●	●	●														
⑦プヌマン(1)											●	●	●	●																			
⑧プヌマン(2)											●	●	●	●																			
⑨クンブル・チュニカン							●	●	●	●																							
⑩クンブル・グデナン						●	●	●																									
⑪ゴン・チュニカン				●	●	●	●																										
⑫ゴン・グデナン	●	●	●	●																													

（近似値：1=E♭ 2=E 3=G♭ 4=A♭ 5=A 6=B 7=D♭）

［図２：パヤンガン村主催者所有のスロンディン楽器の鍵板音列］（グンデル・ワヤンによる影響）

楽器名称＼鍵板番号					A3							A4							A5					
	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2
①不明（伴奏楽器）																●	●	●	●	●	●	●	●
②不明（伴奏楽器）														●	●	●	●	●	●	●			
③不明（主旋律楽器）									●	●	●	●	●	●	●								
④ジェゴガン・クチル							●	●	●	●													
⑤ジェゴガン・クチル					●	●	●	●															
⑥ジェゴガン・グデ			●	●	●																		
⑦ジェゴガン・グデ	●	●	●	●																			

（近似値：1=E♭ 2=E 3=G♭ 4=A♭ 5=A 6=B 7=D♭）

（2） 現代バリにおける音楽と反動主義：

現地調査から観察したスロンディン復興現象の背景として、ポスト・スハルト時代の社会変動に加え、以下２つのバリ社会を覆う不安感に対する反動主義的感情が内在していることを分析した。

一つは観光開発へのアンビンバレンツな感情である。バリ島の観光は植民地時代に始まり、80 年代から 90 年代にかけて黄金

期を迎えた。しかし現在では自然破壊や地域共同体社会の混乱への懸念から観光に対する否定的な感情が広まっている。スロンディン復興の担い手の多くからこうした発言が多くみられたことから、その意味で彼らの実践は「正しいバリ」を復活させるための音楽的アクティヴィズムであるととらえることができる。しかし一方で重要なのは、この思考は決して単線的な原点回帰としてではなく、内と外、伝統と観光、実体とメディアといった境界のあわいで複雑な拡張と増殖を続けている点にある。この多面的な様相については項目５の[雑誌論文：１－３]で論じた。

もう一つは、グローバリゼーションの文脈におけるスロンディンの文化的価値の再発見である。なかでも着目したのが、現地のスロンディン研究者であるパンデ・ワヤン・トゥサン氏によるブサキ寺院におけるスロンディン復興活動である。氏との対話を通じて明らかとなったのは、第一に彼の研究の原動力となったのが、「他者（外国人研究者）に構築されるバリ文化論」への違和感、還元すれば学問的グローバリゼーションへの懸念である点にある。この意味において氏が推進したブサキ寺院でのスロンディン復興と儀礼文化への導入は一種のグローカリゼーションに根差したアクティヴィズムであり、かつこの寺院がバリ儀礼文化をイデオロギー的に統括するヒンドゥー総本山である以上、その影響はきわめて重要である。特に２年目の後半からはこの現象への観察と分析を重点化し、その成果は2018年７月に予定の国際学会での発表（項目５[学会発表：１]）で発信する。

以上の研究成果の他、国際的な学術交流の拡大（国際学会での発信、国立スラバヤ大学での研究交流など）をはかることができたのも本研究の大きな成果である。その一方、一連の研究経緯から３年目に予定していたカランガッスム県（特にブサキ寺院）での調査が、同地域に位置する最高峰アグン山の噴火により実現不可能となった。この参与観察を映像民族誌の主要な一部として考えていたため、映像民族誌については編集段階のままとなった。学会発表や論文としての成果発信は一定の達成を得たことふまえ、この課題については今後より質の高いかたちで完結させる所存である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

１．Akiko Nozawa　‘Beyond the Value of Reproduction: The Imagined Revival of the Sacred Gamelan *SELONDING* in Bali, Indonesia’, in *Proceeding of the 4th Symposium The ICTM Study Group on the Performing Art of Southeast Asia*, pp.210-217, Universiti Sains Malaysia: Penang, No Peer Review, 2017

２．野澤暁子、「想像と記憶の音楽再興—インドネシア・バリ島、複製技術時代における音と形のダイナミズム—」『人類学研究所研究論集第２号』、南山大学人類学研究所、pp.95-115、査読：無、2016年

３．．野澤暁子、「プロセスとしての音楽知の映像化—インドネシア・バリ島の「スロンディン」撮影プロジェクトの実践から—」『Heritex vol.2』、pp.197-213、名古屋大学大学院文学研究科附属・人類文化遺産テクスト学研究センター：名古屋、査読

無、2016 年

〔学会発表〕（計５件）

１．Akiko Nozawa ‘Reassembling Musical Heritage: The Agency of Wayan Pande Tusan and Gamelan *Selonding* Culture in Bali’, The 5th Symposium of the ICTM study group on the Performing Arts of Southeast Asia (Venue: Sabah museum, Malaysia), 7-21-2018(発表確定).

２．Akiko Nozawa ‘Beyond the Value of Reproduction: The Imagined Revival of the Sacred Gamelan *SELONDING* in Bali, Indonesia’ (the 4th symposium of The group of Performing Arts of Southeast Asia/The International Council of Traditional Music, Cititel Hotel, Penang, Malaysia), 8- 5-2016.

３．野澤暁子「聖なる鉄琴スロンディンの民族誌－バリ島トゥガナン・プグリンシンガン村の生活、信仰、音楽（自著解題）」、第 31 回まるはち人類学会合評会、南山大学人類学研究所、2015 年 12 月 9 日

４．Akiko Nozawa ‘Negotiation of Musical Knowledge for Film Production: a case study of a *SELONDING* Film Project in Bali, Indonesia’ (SEM-ICTM 2015 Forum ‘Transforming Ethnomusicological Praxis through Activism and Community Engagement’, University of Limerick, Ireland), 9-15-2015.

５．野澤暁子「音楽映像化をめぐる〈記録〉と〈伝承〉の交渉—バリ島の聖なる鉄琴・スロンディンの撮影プロジェクトより—」（日本文化人類学会第 49 回研究大会、大阪国際交流センター）、2015 年 5 月 31 日

〔図書〕（計－件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計－件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計－件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

野澤暁子　（NOZAWA, Akiko）
名古屋大学大学院人文学研究科
博士研究員

研究者番号：20340599

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)